

23 高木兼寛の健康教育観に関する研究

(第二報) —— 臨時教育会議での高等・大学教育改善に関する発言内容から ——

芳賀佐和子¹⁾・平尾真智子¹⁾・蝦名總子²⁾

¹⁾ 東京慈恵会医科大学医学部看護学校

²⁾ 慈恵看護専門学校

高木兼寛(一八四九〜一九二〇)の高等・大学教育に対する健康教育観を臨時教育会議での発言内容から明らかにすることを目的に研究を行った。本研究は今年の第一〇七回日本医史学会より継続して行っているものである。

研究資料として、大正六年に内閣の諮問機関として設置された臨時教育会議における出席者の発言の速記録を用い、高木兼寛の高等教育・大学教育における健康教育観の表現されている第十一、十六〜十八回総会での発言に注目し、その内容を分析した。速記録は文部省編『資料臨時教育会議』第三・四卷(全五冊)、文

部省、一九七九を用いた。

臨時教育会議は大正六(一九一七)年十月一日から大正八(一九一九)年三月二十八日までの一年半の間に総会三〇回を開催。委員は約三十名で諮問は小学校教育、高等普通教育、大学教育・専門教育、師範教育、女子教育、実業教育、などに及んだ。高木兼寛は当時七〇歳で、東京慈恵会医院医学専門学校長であった。彼は英国のセント・トマス病院医学校を卒業後、明治一四年に成医会講習所(後の慈恵医大)、一五年に有志共立東京病院(後の慈恵医大病院)、一八年に看護婦教育所(後の慈恵看護専門学校)を創設。東京海軍病院長、海軍軍医総監などを歴任、海軍兵食改善で脚氣予防に成功、貴族院議員も務めた。

高木は全三〇回のうち二六回の会議に出席、ほぼ毎回発言をしている。そのうち高等・大学教育での健康教育観の表現されている発言内容を整理し分析を行なった。発言内容は①高等普通教育を修める学生の体格は徴兵検査の成績も不良で改善の必要がある、②大学卒業者の身体が弱い、視力が低下し皆眼鏡をかけてい

る。体格が細い、身長はかなりあるが、腕力が弱い。徴兵検査の成績から大学卒業生の十人に一人しか甲種合格の体格を持つ者がなく、③高等普通教育に関する答申案に「体育」に関することがなく疎かにされている、④高等普通教育を受ける学生の衛生状態は寒心に堪えない、中学生徒等の健康の状態、中等学校を経た者の徴兵検査成績が不良のため中等学校でも体育が必要である、⑤体育に関する根本調査が必要である、⑥体育という言葉が紙面上にあるほうが人の意を引いて体育奨励を重んずる風を生じ効果を収めることになる、⑦精神面での教育に関して。高等教育を受けたものに国民思想の確立せざる者が多い、宗教を教える大学も必要である、小学校は国民学校と改称したほうが国民の精神が安心する、というものである。

高木は高等・大学教育においても「体育」の必要性を強調している。当時彼は東京慈恵会医院医学専門学校長をしており、学科目に「体育」を取り入れ、また課外活動の運動部の活動に力を入れ、運動会を開催したり、看護婦教育所の学科目にも「体育」を取り入れ、

女子生徒に水泳を勧めるなど青年期の学生・生徒の体格向上にむけた実践をしている。「体育重視」の教育方針は前身の成医学校の明治二十三年の学科目に「体操」として表われ、三十三年の卒業式からは集団徒手体操を来賓に供覧している。三十六年医学専門学校に昇格後も「体操科」は継続し、翌年には日比谷公園で運動会が開催されている。大正四年には貴族院で、壮丁の体位低下はあるが、本校では体操・武道などを課し、大いに効果をあげていると演説し、体育の振興を要望した。この頃高木が一般普及を目的に考案したのが「海行かば」の舟漕体操である。学校には柔剣道場や相撲場などがあつた。予科では高等普通教育を行い、知育・徳育・体育を支柱とする人間教育を主眼にした教育を行った。

今回の発言内容から、高木兼寛の高等・大学教育における健康教育観の特徴として、小学校教育に継続して、これらの教育機関においても国民体位の基盤となる体位向上のための「体育」を取り入れるように強調・提言していることが明らかとなった。